

## 第2章 銃後

# 子どもたちの生活④〔山形県〕 空襲におびえ、空腹に泣いて

かなつとよふみ  
金津豊文さんのお話から

私は、昭和十一年（一九三六年）に山形県西置賜郡小国町に生まれました。私が二歳のとき、昭和十二年に日中戦争が始まりました。その四年後、私が六歳の時の昭和十六年十二月八日には、日本の海軍がハワイの真珠湾を奇襲攻撃したのです。これが、太平洋戦争の始まりでした。

私はまだ小学生でしたから戦場には行っていません。しかし、戦場に行って死んだ人、空襲にあつて死んだ人だけが大変だったのではなく、日本人みんなが大変だったと言うことを、戦争の時代を生きた一人として、私はみなさんに知ってほしいと思います。

私の住んでいた小国町には、鉄やカーバイドを作る軍需工場がありました。軍需工場のあつた町は、ねらわれて空襲されることが多く、いつ空襲があるのかとおびえていました。

敵の飛行機が近づいてくると、夜中いつでも空襲警報が出されて町中にサイレンが鳴り響きます。私の父は軍需工場で働いていました。工場に爆弾が落とされたら、誰かが火を消したり、大切なものを工場から運んだりしなければなりません。父は自分の危険をかえりみず、工場へ走って行きました。もしも、爆弾が落とされたら町中が火の海になります。だから、私と母は近くの山へ逃げました。私たちの家族だけではなく、町の全ての人が山に逃げていったのです。

夜、空襲をするために飛んでくる飛行機は、町の明かりを目標して来ます。だから、街灯も消し、家の光が外へもれないようにしなければなりません。これを灯火管制と言います。

- 奇襲 相手の油断、不意をついて、思いがけない方法でおそつこと。不意打ち。
- 軍需工場 軍隊が必要とするものを作る工場。主に武器やその材料などを生産する。
- カーバイド 硬く重い金属として武器に使われた。

○警防団 地元の防災のために地域の人々で作られた組織。

町の家々ではふるしきを電灯のかきの周りをグルリと取り囲むようにしてまき、外へ光がもれないようにしながら、ご飯を食べたり、勉強をしたりしました。外に光がもれると敵に見つかってしまうので、警防団の人が交代で見回りをしていました。もし、光がもれている家があると「そこ、光がもれているぞ。」と大きな声  
 でどなるのです。

私たちは、学校の体操場、今で言う体育館で防空演習というものを行っていました。上から飛行機が爆弾を落としてきたときのための練習です。爆弾が落とされると、ものすごい爆風で目をやられてしまいます。そこで私たちは、目を押さえるのです。そして、鼻をふさぎます。爆発でおきた熱い空気を吸えば、肺がやられてしまうからです。また、爆発の大きな音で耳の鼓膜がやぶれてしまうこともあります。耳も押さええます。このように、逃げる訓練をすることが防空演習です。また、爆弾が落とされたときにかくれるためのあな、防空壕もみんなまでほりました。



イメージ図

防空壕

空襲におびえ、空腹に泣いて

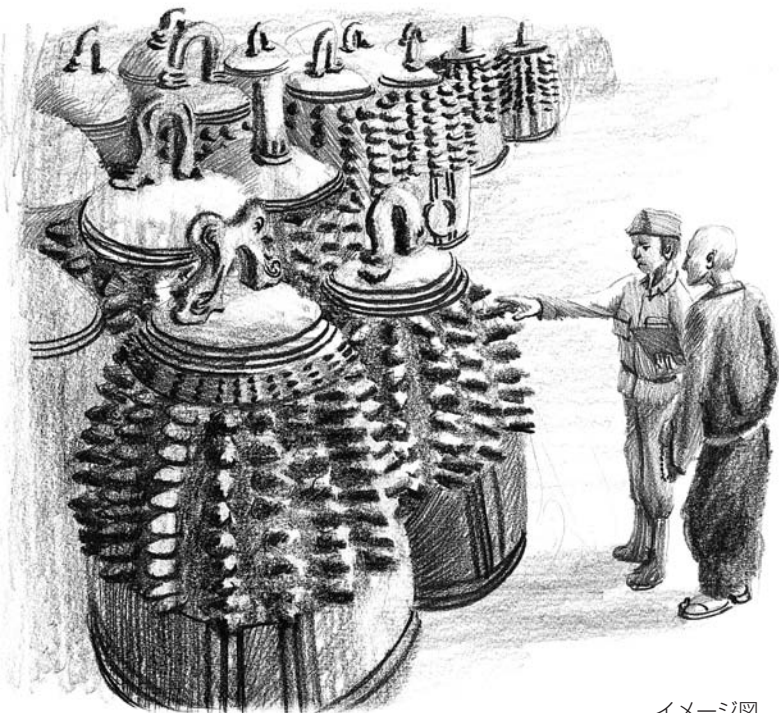


学校へ通うときには、防空頭巾ぼうくうずきんを必ずもって行きました。爆弾から自分の頭や目や鼻や耳を守るためには、無くてはならないものだったのです。だから、子どもだけではなく、大人もみんな防空頭巾を持って歩きました。こんなに怖がっていた空襲ですが、幸いなことに私わたくしたち

の町では、爆弾はひとつも落ちてきませんでした。空襲だけでなく、食べるものがないことでもつらい思いをしました。米は貴重なので大根を混ぜたりして、少しでお米を少なくしながらおなかがいっぱいになるよう工夫しました。また、パンにも雑草を混ぜて焼いていました。

また、当時は自由に買い物できませんでした。米も、みそも、しょうゆも、家族の人数によって決められた量の分だけキップをもりました。そのキップと食べ物を交換するのです。これを配給はいきゅうといいます。この当時、物は全て配給でした。

しかし、配給される食べ物だけでは生きていけないのです。おなかがへって死んでしまうのです。そこで、私わたくしの母は農家にお金や着るものを持って行き、お米や食べるものと取り替えてきていました。また、闇市やみいちという場所もあり、かくれて物を買ったり売ったりすることができました。しかし、これらは法



イメージ図

金属回収きんぞくかいしゅうで出されたお寺の鐘かね

○梵鐘ぼんしやう

お寺のつり鐘。

律に違反することなので、警察官に見つかる、せつかく手に入れた食べ物も全て取り上げられてしまうのです。

どうしても食べ物がないとなると「次のときに返しますから、少しだけでも分けてください。」と近所の家に食べ物を借りに行きます。それでも食べ物がないときには、お母さんがこう言っわたくして私にだけ食べさせてくれました。「お母さんはおなかが痛くてご飯が食べられないから、お前だけ食べなさい……。」本当は自分もおなかが空いているはずなのに、子どもに食べさせるためにうそをついていたのです。当時の生活は苦しく、よく母と二人で泣きました。そのころのことを思い出すと、今でも涙が出てきます。

戦争がいよいよはげしくなってくると、供出きょうしゅつが始まりました。資源が少なくなると飛行機や武器を作れなくなってきたので、家にある鉄や銅を出さなければならなかったのです。なべや、やかんなど、家中の鉄や銅を出しました。私わたくしの家はお寺だったので、梵鐘ぼんしやうというお寺の大きな鐘かねを出すことになりました。さらには、川にかかっている橋の手すりまで材料のために持って行ってしまいました。

戦争というのは、戦った人だけではなく、その後ろにいる全ての人々はみんなつらい生活をしなければならぬのです。どんなことがあっても、人と話し合っあって解決する気持ちを忘れてしまふと、みんなが不幸になるのです。死んで命を落とした人たちがかわいそうです。戦争は、絶対にやっやつてはならないことなのです。

## DATA

平成20年度手稲区平和事業

聴き取り

- ・平成20年12月3日
- ・前田小学校



金津豊文(かなつ・とよふみ)さん

- ・昭和11年(1936年)生まれ
- ・札幌市手稲区在住